

# 文化高知

'95年1月 NO.63



「寒梅著花春酒香」安藤雀栖

(財)高知市文化振興事業団

# 文化の屋根

松尾 徹人

行政に文化の屋根を

ひよつとして、このキャッチフレーズを耳にされた方があるかもしれない。実は、これは、昭和五十年当時の滋賀県の文化行政のキャッチフレーズである。もう二十年近くも前の、まだ文化行政ということばさえも熟していなかった頃のことである。当時の武村正義（現大蔵大臣）滋賀県知事の先見的な発想により、全国で初めて文化振興課という組織が誕生し、その初代課長が私だった。武村知事から「予算はいくらでもつけるから、思いきったことをやってみよう」と、今から考えると恐ろしくなるような勇断により、今日の文化行政の草分けとしての試行錯誤が始まった。

このキャッチフレーズは、とにかく文化財保護とか芸術文化だけでなく、行政全体に文化的発想を導入しようということ、屋根がいか柱がいいか土台がいいかなどと武村知

事と議論する中でまとまったもので、今でも私自身身に入っているなつかしいキャッチフレーズだ。武村知事は、マッチ箱のように四角なコンクリートの建物が嫌い、出身地の八日市市においては「屋根のあるまち」をテーマにまちづくりがなされ、ユニークな町並みとなっている。あの日本の瓦の屋根が人間的な温かみを感じさせる。まちづくりの文化的な発想として、今でも十分使えそうだと思う。

私は、すべての行政分野に文化的発想を入れるということは、言い換えれば人間性を大切に行政、行政、行政、センスのある行政、温かみのある行政、感動を与える行政ということではないかと思う。それは、私の嫌いな「官僚的」であってはならないということにはかならない。広い意味の文化行政は、行政のやり方にかかわるものであり、すべての行政分野に通じて必要な行政理念と

いべきものである。文化的に行われる行政が、すなわち広い意味の文化行政である。

そして狭い意味の文化行政も重要である。伝統文化を守り育てる、芸術文化を花開かせる、市民の生活に根ざした文化を大切に、個性豊かな街並みをつくる。ともすればストレスの多い人間関係となりがちな現代の競争社会にあつて、心のうるおいとゆとりこそ市民の生活の重要な要素となりつつある。

文化が人間の内発的なものとすれば、行政は、結果的にしろ文化的な芽生えをつみとるようなことは許されないし、過度に文化の内容に立ち入るべきではないだろう。あくまで



文化を育むための場づくり、環境整備を基本とすべきだが、そのためには、行政に携わる者が文化的なセンスを持ちあわせなければならぬ。行政の文化化という奇妙なことを作らなくては行政が望まれる。人口三十万人の高知市は、県庁所在地として、若い人も高齢者もそれぞれの欲求を満たしながら住みやすさを実感できるためには、都会の魅力といなかの魅力とその両方を兼ね備えなければならぬし、それが可能な適正規模でもある。都会の魅力といえば、遊び、にぎわいとともな文化的な欲求を満たせる場が不可欠である。高知はまだ若者をとどめるだけの文化に触れ合う場が少ない。本物に触れる感動、創作し発表する喜びを若い時代に味わってほしい。そのことが自分の可能性をより高めるきっかけになることがあるからだ。

歩いているだけで楽しくなるようなそんな街並みがほしい。都市のグレートは、街並みに表現される。街並みに市民のセンスや文化性が表われる。若い人はこうした文化性に敏感である。若者の声はずむ街に新しい文化が生まれる。

若者の手で、高知市に新しい文化の屋根が築かれることを望みたい。

（高知市長）

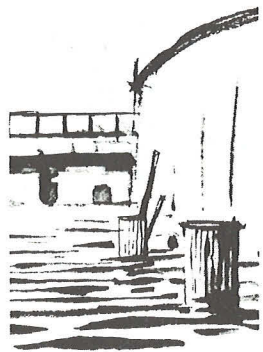
## 土佐弁と芝居の表現

北村 文典

兎追いし彼の山 小鮒釣りし彼の川……高知市内を流れる鏡川、江ノ口川や堀川の外側には、童謡の歌詞どおりの風景がひろがっていました。昭和二十年後半から三十年代にかけて、小学生の私は、丸池町の池や、弥右衛門の沼で鮒釣りに熱中し、お城や筆山、さらに小高坂山や秦泉寺まで蟬やとんぼを追いかけ、木の実をひろったりしたことが、昨日の出来事のようにです。

そして今、生まれ育った南国土佐を後にして、商業演劇の世界に入り、脚本の中から、役者のセリフや動きを方向づけ、大道具や衣装、音楽等のスタッフワークを融合させて、一つの舞台をつくりあげるといふ仕事について、はや二十五五年が過ぎようとしています。

今月は、帝国劇場で山田五十鈴主演の「愛染め高尾」の演出を担当しています。この物語は、享保時代、松の位の吉原遊女・高尾が、金に糸目はつけない豪商や武家には見向き



もせず、一介の駄染め屋職人に嫁ぐという事件をもとに脚色されています。たまたま私の生家が、はりまや町二丁目（旧・新市町）で、百数十年続く染物屋ということもあり、また、太平洋と四国山脈の自然にこまれて、四季おりおりの色彩に変化する土佐の風土に育ったことが、今回の芝居の色調や、舞台の背景づくりに大きな支えとなっています。さらに忘れてならないことは、私が土佐弁の中で育ったことです。土佐弁のもつイントネーションには、役者が適切なセリフ表現を見つけ出

するための、数多くのヒントがかくされています。

日本が文明国家になっていくにつれて、標準語が浸透し、テレビ等の情報網の発達から、地方と中央都市の接近も急速ですが、豊かな感性を持った方言を、いなか者の話す言葉として笑いの材料のみにつかい、本来の心情を正確に伝達する手段でもある言葉としての役割を否定しているような気がします。

この芝居に出てくる吉原遊女には、廓（くわく）ことば・里ことばと呼ぶ特殊なことばづかいがありました。「いかなる遠国よりきたれる女にても、このことばをつかうときは、鄙（びん）のなまり抜けて、古くより居なれたる遊女と同じように聞こゆるなり」と、もの本にあるとおり、国なまりを消して色気を出すために編み出された、いわば風俗営業用の人造語です。「ございます」「おざんす」「おざりんす」「あります」「ありんす」「しなさい」「を」「しなんし」という活用が一般人には耳立つので、アリンズことばともいわれたそうです。しかし、そのひびきには、いくらか統一された新造語であつても、現在の標準語とくらべてみると、派手やかな虚飾の世界に生きる女たちの心の中に秘められた喜怒哀楽がこめられており、それがひびきの中に

じみ出てきます。

私は役者のセリフ表現や動きを導き出す作業の時、そのセリフを土佐弁に翻訳して、そのイントネーションから、感情表現を見つけようとすることがあります。手がつけられないほど困惑していることを、「タレモツレル」と土佐弁で言いますが、なんとなく状況が想像される表現です。熱中することを、「ヒガチニナル」、理論で相手をやっつけることを、「ダンツメル」と言いますが、火のように燃えたり、談じながら前へ前へと詰め寄っていく様子が目にかかれば、その時の顔色や息づかいまで推測されます。「身振りには心のあまり」という世阿弥の有名な言葉があります。土佐弁のひびきには、身振りや心があふれています。

数年前、やと暇を見つけて帰高する時、羽田の高知行きの塔乗口へ行くと、土佐弁が大声で飛びかっっており、飛行機に乗る前に、なつかしい土佐へ帰りついた気分になりました。そして身ぶりをまじえて話している人達が、土佐弁に、そして土佐の風土に、土佐人であることに大きな誇りを持っていることがわかりました。南国土佐を後にして四半世紀、嬉しくなった私は、思わず「よさこい節」を口ずさんでいました。

（舞台演出家 東宝演出部）

# 高校生の文化活動

石田 正俊

高等学校における生徒の文化的活動は、そのほとんどがクラブ活動及び部活動の中で行われています。元来、クラブ活動は、生徒会活動の一環として生徒一人ひとりの興味・関心に応じて自由に参加でき、その活動も自主性を大切に、のびのびと個性を発揮できる楽しい活動であります。高校時代を振り返るとき、修学旅行や運動会などともに文化祭や日常のクラブ活動が楽しい思い出となっている人も多いと思います。学校の教育課程のうえで、このクラブ活動は、国の示す学習指導要領に特別活動として位置づけられており、その取り扱いにあたり必修クラブと部活動に区別されています。これは、昭和四十五年の高等学校学習指導要領改訂により週一時間のクラブ活動が生徒全員に義務づけられたもので、この時程表にのっているクラブ活動を必修クラブと呼び、従来

の自由参加による放課後のクラブ活動を部活動と呼んで区別しております。この全員必修のクラブ活動を行うについては、施設・設備の問題や時間確保の問題など論議がありましたが、実施によりクラブ活動の底辺を広げることができ、部活動と合わせて複数の活動が経験できるなどのメリットもあり今日まで実施されてきました。しかし、平成六年度からの新教育課程では、その実施方法に関して部活動をもって必修クラブ活動に代替することも可能になるなど弾力的に運用できるようにになっています。さて、このような変遷をたどってきたクラブ活動(部活動)ですが、その活動は文化系クラブと体育系クラブでかなりの差異があります。体育系クラブ活動については、全国的に早くから各県に高等学校体育連盟が結成され、高校生のスポーツ振興

の立場から体育系クラブの活動を支援するとともに、種目ごとの競技会を支部大会、県大会と行う一方、毎年高知県高等学校総合体育大会を盛大に開催し、高校生のスポーツの祭典となつていき、さらに、昭和二十八年には、全国高等学校体育連盟が組織され、昭和三十八年からは全国高等学校総合体育大会が開催されるなど高校生のスポーツ活動は今日の隆盛を見るに至っています。一方、文化系クラブ活動については、昭和五十二年に文化庁の働きかけで第一回の全国高等学校総合文化祭が行われています。この前後から各県に高等学校文化連盟の結成が進み、その数が全国道府県の過半数に達した昭和六十一年に全国高等学校文化連盟が設立されました。本県では、昭和五十三年に県教育委員会の文化振興室が文化振興課となり、この年、同課の呼びかけに応じて、当時高校の文化活動の第一線にいた教員が中心になって高知県高等学校芸術団体協議会(以下高芸協と略称する)を結成しています。この会は、高等学校における芸術活動の育成と発展を図ることを目的に結成され、同年に第一回高知県高等学校芸術祭を開催しており、以後今日まで各芸術団体の発表会の開催や相互の交流を推進してきました。

しかしながら、高等学校における文化系のクラブ活動は、全体的に見て活発とはいえず、体育系活動に比べ脆弱であるといわざるを得ない状態です。その原因は、進学に向けての受験勉強などゆとりのない高校生活、マスメディアの発達により手軽に本格的なものに接することができるようになり自分達の手づくりでやることへの意欲喪失、指導に当たれる教員の問題など種々あると考えられ



本年度演劇コンクール・高知南高「曹達水の夏遊げば」

ます。こうした状況の中で、独自の予算をもたず、組織面でも強固な組織のない高芸協では、現状を超えて高校生の文化活動の発展と文化事業の拡充を図ることはやはり限界であるということになりました。

そこで、数年前から本県にも高等学校体育連盟と同じように独自の財源を持ち、組織のより強固な高等学校文化連盟設立の必要性が強く認識されるようになりました。そこで、高芸協の役員を中心に他県の状況を視察するなど、その設立準備を進めてきました。なにも無いところでの新設と異なり、音楽、美術、書道、演劇などそれぞれ独自の歩みをしてきたものを一つにまとめる困難さはありませんでしたが、本年八月ようやく高知追手前高校の芸術ホールに県下の公私立高校及び盲・聾・養護学校の代表者が集まり、高知県高等学校文化連盟(以下高文連と略称する)の設立総会を行うことができました。

これにより、来年度から正式に高文連がスタートし、県下の高校生全員が会員となつて、その会費を主な財源として文化活動ができることとなりました。

現在、高文連の専門部に所属するのは、音楽・吹奏楽・舞踊・演劇・放送・書道・美術工芸・写真・漫画・囲碁・将棋の十一の各専門部です。

今後の事業計画については、作成中ですが、来年度は発足初年度であり、これまで実施してきた高知県高等学校総合文化祭を中心にしながらその充実、振興を図っていく予定です。この総合文化祭は、高知県高等学校総合体育大会(県体)と違ってまだ県民の皆さんに知られていない面が多いと思いますので、ここに本年度の第十七回総合文化祭の事業内容を紹介いたします。

- 第十八回高知県高等学校吹奏楽祭 10/8
- 第四十六回高知県高等学校連合音楽会 11/3
- 第十七回高等学校書道展 11/24 ~ 11/27
- 第三十二回高知県高等学校創作舞踊合同発表会 11/5
- 第四十四回高知県高等学校演劇コンクール 11/19 ~ 11/20
- 第四十四回高等学校美術展 11/16 ~ 11/20
- 第十四回高知県高等学校写真展 1/19 ~ 1/28
- 第三回高知県高等学校秋季放送コンテスト 11/12
- 第十八回高等学校囲碁選手権大会 6/19
- 第三十回全国高等学校将棋選手権高知県予選 6/19
- 第三回高知県高等学校マンガク 6/19


ラブ連盟「かつおの会」合同展 1/5 ~ 1/8  
発表会

次に、今年八月四日(八日愛媛県で開催された第十八回全国高等学校総合文化祭に本県から参加した部門と学校を紹介します。

- パレード (よさこい鳴子踊り) 高知南
- 郷土芸能 (津野山神楽) 梶原
- 放送 (アナウンス) 土佐女・追手前 (朗読) 高知南・土佐女・追手前 (ビデオ) 高知南・高知商 (オーディオピクチャー) 土佐女
- 写真 岡豊・高工・大栃・学芸

以上、本県の高校生の文化活動について、その取り組みや経緯を紹介してきましたが、多くはまだまだ弱体であり今後各部門においてレベルアップを図るため研修会・講習会を行うなど振興・発展に向けて課題の多い状態です。これからも読者の皆様の暖かいご指導・ご援助をお願いいたします。また、各専門部が幾つか同時に発表会が行えるような会場の必要性を痛感いたします。どうかこの方面でもご理解・ご支援をお願い申し上げます。

高知県高等学校芸術団体協議会会長/高知南高校長



**ザイラーピアノデュオ 春宵コンサート**

1995年3月3日(金) 午後7時開演(開場 午後6時30分)

高知県民文化ホール(グリーン)

入場料金：前売り/3,000円 当日/3,500円

チケット：市内主要プレイガイド、高知市文化振興事業団で発売中。

※電話予約 (事業団・0888-73-4365) もご利用下さい。

主催：(財)高知市文化振興事業団+カナート



### 和菓子に目覚めて三十余年

刈谷 喜明



それは敗戦直前の昭和二十年半ばのことでした。当時は日本中の誰もが甘さに飢えていました。そんな時、小学三年生だった私は、高知の親類の家で生まれて初めてバナナ菓子を口にしたのです。これが菓子らしきものと出合った最初の記憶となっています。

その美味しかったこと。世の中にこんなに美味しいお菓子があるとは……。おさな心に「よし、大きくなったら菓子屋になろう。そうすれば毎日こんなに美味しいものを食べることができると、そう決心した私は、学校を卒業すると迷わず菓子屋に就職いたしました。そこで三年間、みっちり基礎から教えてい

いただきましたが、ようやくお菓子のことが分かった頃、大阪から来ていた先輩に「お菓子をもっと勉強したいなら京都へ行け」と勧められ、早速京都の老舗を紹介していただきました。京都では、それまでの三年間の実績など全く通じない世界が待ち受けていました。朝はまず店の外回りの掃除から始まり、主人や家族の部屋掃除からトイレ掃除を済ませ、昼は工場から出来上がってくる饅頭の包装、それが済むと各店へ配達作業。夕方になると風呂掃除の後、主人の背中を流し、夜は夜で店番をする毎日。いったい何時になったら菓子工場へ入れてもらえるのか、焦りと不安の生活が長い間続き、ようやく工場へ入れさせてもらったのは、京都へ来て一年が過ぎようとする頃でした。

主人は仕事になるととても厳しく、特に材料選びには頑固なまでに良いものを追求するという徹底ぶりでした。当時は、安い材料で良い菓子を作る人が腕のいい職人と言われていたが、私の主人は「良い材料を使って、うまい菓子を作れ。それが本当の職人である」が口癖で、それを実践いたしました。そしてこの言葉は、今の私のモットーでもあります。

高知で独立し、今こうして菓子作りが出来るのも、こうした厳しい主人のもとで七年間鍛えられたお陰だと感謝しています。菓子作りを続けて三十余年。これからもまだまだ修行は続きますが、昔の私のように「おいしい」と言ってくれる人がいる限り、私は菓子職人を続けていく覚悟です。「季節は菓子から生まれる」、この言葉を大切にしながら……。

(銘菓創園 桂)



### 私と帽子

池田 かよ



私と帽子とのかかわりは、近所のおしゃれなおばさんにつれられて、上町四丁目にあった帽子屋さんで、洋服を仕立てた残り布で帽子を作ってもらった時に始まります。その時の嬉しさ、一枚の布がこんなに丸くきれいな帽子になった不思議さ、自分の一生の仕事につながる事になるとは、思いもかけないことでした。今思えばとても贅沢なことですが、その当時は靴も靴屋さんで作ってもらった時代。紙風船を半分にして頭に被るとキャップに、風呂敷をねじって巻きつけるとターバンになる。こんな遊びをしているうちに本物の帽子を自分の手で作りたいと思い、上京しました。

帽子デザイナーの卵時代には、ファッションショーのための大胆なもの、銀座の店に並ぶディスプレイ用の帽子など、思い切った仕事をさせてもらったりして楽しい経験もありましたが、被り手が見えないというもの足りなさが残りました。被ってくれる人が見える帽子作りをしたいと思いました。東京の先輩や友人達からは、田舎でやっていける訳がない。まあ統一して一年と言われ、自分でもそう思いました。でも、故郷高知への愛着と、高知の街を行く人たちの頭になれば楽しいなという夢にうながされて、帰高しました。

念願の仕事場と店とがいつしよになった場所を構えることが出来たのは、十三年前。豊かさとは無縁の状況は、今もって変わりませんが、お客様一人ひとりと、お目にかかって、その方にびったりと信じられる作品を作っていくことで満足を得ています。

シャネルが帽子店を開いた時、おしゃれな友人に被ってもらって、動く広告塔になってもらったという話がありますが、私も高知ならではの先輩、友人に恵まれ支えられて、帽子のみのわがままな仕事が続けられています。

帽子の下にはしあわせが宿っているといいますが、とすれば、私はしあわせを売る女と違ってよいのではないかと、あつかましいことを考え、被って下さる方のしあわせを折って毎日ミシンに向かっていきます。

(ZAZA CHAPEAU)



### ハーブ栽培にとりくんで

楠瀬 康博



ハーブを栽培し始めて十年近くになる。最近思うことであるが、いつになったら納得のいく品質のハーブを作ることが出来るのであるだろうか。たぶん生涯目標の品質を追い続けるだろう。

昨年の三月に勤めを辞め、家業を継ぎ農業を始めた。ハーブと花卉を栽培、高知市の市場へ出荷する小さな農家である。学校を卒業して県外で会社勤めを始めた頃は、将来の事についてあまり深く考えてはいなかったが、いつの頃からか「高知に帰って高知で生活したい」と思うようになっていた。会社の「営業の強化」の方針もあって、関東の工場から四国営業所そして高知営業所へと転勤となった。自宅から通勤

をしていたので、休日は父のする農業を少し手伝っていた。父に勧められて工業系の職業を選んだのであったが、この頃から農業の楽しさ、面白さを感じていたのかもしれない。最初の会社を辞め、地元の農協に就職した。生まれ育ったところでの仕事生活は何となく安心、やすらぎがある。農業がどんなものか私なりの模索が始まった。

勤めをしながら作れるもの、管理が楽、出荷期が長い等の条件から最初に取り組んだのがゼラニウム。多くの品種を集めるうちにローズゼラニウムというハーブの仲間に出合った。これが私のハーブとの出会いであった。

ハーブについて検討を始めると、自分の周りの条件、環境、人間関係がうまく絡み合い順調に進んでいった。十年近くハーブを作ったのは、私達夫婦とつき合って下さっている多くの友人、知人の力である。

私が今仕事をするにあたって指針とする言葉がいくつかある。ひとつは、最初の会社の従業員行動綱領にあったと思うが「文化に貢献、社会に奉仕の使命を果たすよう努力します」である。次に営業所時代の言葉で「セールスマンは結果で勝負する」。そして父が話していた「成功とは最後まで残ることである」。もうひとつ自分が落ち込んだ時に思出す言葉「嵐来い」である。出来るだけ多くの人にハーブを通じて楽しく心豊かな生活をしていただきたい。そのために私は「えい(良い)ハーブ」を作るよう努力を続ける。

(アットイーズ園農園)

# 土佐の褐牛(アカウシ) その2

町田 隆彦

【土佐褐牛の歴史】  
高知県の在来牛は黒毛牛であったといわれるが、明治十二年頃大分県から韓牛を香美郡・安芸郡に導入したところ使役能力・耐暑性に優れ、当時盛んであった水稲二期作地帯において好評であり、だんだんと数多く移入されるようになった。明治二十九年に長岡郡介良村(高知市介良)の家畜商川添徳馬氏が韓国慶尚北道蔚山市場から三十一頭の韓牛を直輸入したことによって県内各地で韓牛の純粋繁殖が行われた。明治四十三年の日韓併合を契機に韓牛を直輸入し激増する。

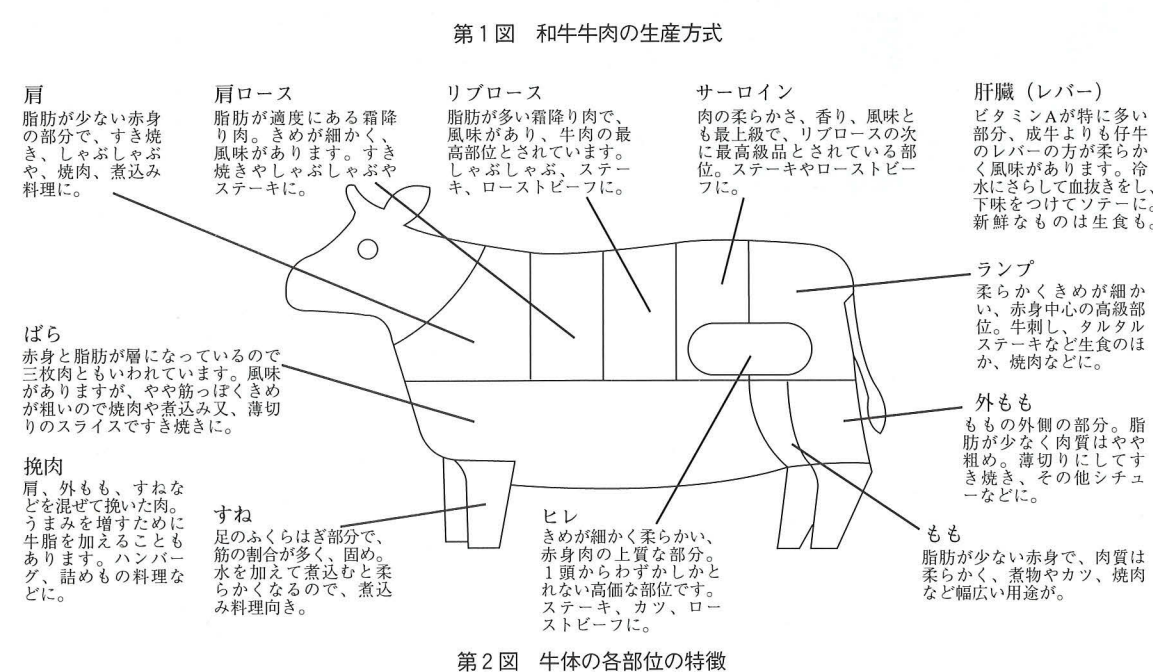
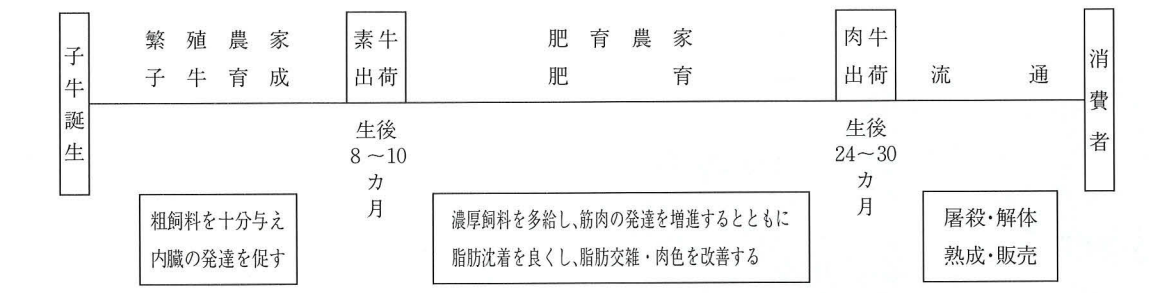
明治三十九年に至り、韓牛の欠点であった体積とくに後軀が貧弱なこと、泌乳量が少ないことなどを改良するために、広島県七塚原牧場からシンメンタール種雄牛数頭を導入し交配に努めたが、逆に敏捷性を欠き作業能力が落ちたこと、耐暑性や肉質が低下したために明治四十三年のごく短い期間で打ち切り、以後は韓牛の種雄牛で戻し交配をし優れた子孫を選抜した。大正七年に登録事業を開始し計画的改良に着手する。大正十一年に熊本県の褐毛種雄牛と交配を試みるが、役肉両面とも土佐人の好みに合わず十四年に交配を中止した。

夏の耐暑性が低下したこと、また、土佐牛独特の特徴である「毛分け」の毛色にこだわる生産農家には、熊本の褐一色(一毛牛)が嫌われた。昭和十三年から十年以上にわたり再度熊本褐牛との交配を試みるが好結果が得られず中断し、以後、土佐の「いっこそう」と肥後の「もっこす」の県民性が張り合い全く交流がみられない。昭和十三年には標準体型が作られ、さらに審査標準も制定されて昭和十九年に和牛の固定品種として黒毛和種・褐毛和種・無角和種の三品種が登録された。昭和二十年以後半には土佐褐毛牛の毛色の問題が大きくゆれた時代があったが、今日でも「毛分け」にこだわっている。

先達の永年にわたる努力によって作出され、発育がよくて無駄な脂肪が少なく可食歩留まりの高い上、脂肪交雑も適度という優れた特徴をもつ土佐褐牛を尾長鶏や闘犬のように鑑賞用の天然記念物にだけはしたくないものである。そのためには褐牛関係者の努力はもろろのこと、消費者が土佐褐牛肉の消費を増大していただくことをお願いしたい。

○カ月の育成素牛を穀物を主体とした濃厚飼料を飽食させて一六〜二〇カ月の長期に肥育する(生後二六〜三〇カ月)。とくに土佐褐牛は発育が良いので二四〜二六カ月で十分に仕上がる。この間、遺伝的特性と飼育技術によって脂肪交雑と肉色の優れた土佐和牛肉に仕上げる。(第1図)

者の利用する精肉となる。雌子牛も去勢肥育牛に準じた方式で肥育出荷する。雌牛は、肉のキメが細かく肉質は優れているが、仕上がり体重は去勢牛の八〇%程度である。



# 地域の輪の広がりを

『思いつきりみとめて子育て』を著してみても

藤本 稔子

本の扉を開け読んでみると、書くときもそうでしたが、三十八年間に出版したたくさんの子どものたちが次々とび出して来て、私に語りかけてくれるのです。その一人ひとりとの出会いがつい昨日のことのように鮮明に浮かんで来て、「みんな、ありがとう」と感謝の言葉をかけながら、この子たちと心を通わせ合った年月の重みと、保育という仕事に携わることのできた幸せを静かに味わっています。そして気がつくと同じ章を何回もなぞっている自分に驚いています。自分でいうのもおかしいですが、なつかしい子どもたちと出会えるこの本がいとおしくとも大切なものとなっています。

「保育」という仕事は、未来に生きる子どもたちを、人間として人間らしく育てる土台づくりの営みです。母親が働いているか否かにかかわらず

ず、現代のように少子化や育児不安などを抱えた家庭状況の下では、子どもにはそれに代わる環境が必要です。それが集団保育だと思っています。集団保育の中で子どもたちは周りにから刺激を受け、働きかけられて心と体を耕し、模倣したり共感したりして、まわりを認識し成長していくのです。

子どもは私たちが考えている以上に前向きで、限らない可能性をもっています。私たちの接し方、経験の与え方によって子どもの成長は大きく左右されます。それだけに保育という仕事は重要であり、少しの手抜きも許されたいのです。保育者たちは、子どもたちから返される明るい笑顔と手応えに励まされるながら、保育は未来を展望することのできる仕事であるという誇



りをもって取り組んでいます。子どもたちは、集団の中で生活や遊びを経験し、自立への道を歩いていきます。友だちと手をつなぐ、衣服の着脱の仕方にも教育があるので。そしてどんなことに取り組みむにもそこに同じ経験をしようとする友だちがいることは、子どもにとって大きな刺激です。見て育つ環境があるからやろうとするのです。

また、子どもは「遊びの中で育つ」といわれます。保育園の生活経験の中で、遊びの分野は大きな位置を占めています。遊びは子どもの生活経験を拡大していく大切な舞台です。

「遊びは学習である」ともいわれていますが、この時期にしっかりと遊んだ子どもは、感性も豊かで自分の意見をしっかりと持っています。

公園へ散歩に行った時のことです。四才児です。公園の石段をヨイショ、ヨイショと掛け声をかけながら上っていました。すると後ろの方からイチ、ニ、サン、シと数えながら上ってくる子どもの声を耳にしたこの子は、途中から自分も数をかぞえながら上ってきました。食事の後、子どもたちはその石段を利用して、ジャンケンとびをして遊んでいます。一、二、三、四と数えたことにヒントを得た石段とびの遊びです。

いもほりにいって掘った芋を自分のリュックサックに詰めながら、「コレ・ボク、コレ・オニイチャン、コレ・オカアサン」と家族一人ひとりに合わせて数をかぞえているのです。子どもの発想や経験は実に具体的です。

保育園の庭に干してあった芋を夕方にとり入れようとして子どもにも手伝ってもらいました。「大きい芋はこの袋、小さい芋はこの袋」と指示すると、「コレハ、オオキイカラ、コノフクロガイイ」「コレハ、チビイモダ」と弁別して「センセイ、チュウクライノフクロハドレ」ときいてきたり、「ソレ、オオキイフク

ロニ、イレタライイ」と相談しあいながら入れていきます。生活の中で生きた学習です。

「これから数の勉強」といってよび集めても何人の子どもが主体的に参加してくるでしょうか。

子どもが興味や関心をもって取り組み、手や足や体を使った経験を豊かに展開することである力を獲得していきます。

これは一例に過ぎませんが、この本には集団の中での子ども同士のふれあいや、保育の取り組みなど、子どものすばらしさをたくさん事例で紹介しています。本の中頃に「体



の仕組みを知る」という章があります。自分の体の仕組みを知った子どもたちが、自分の体を自分で育てていく主人公として自覚的に取り組む姿をありのままに描きました。それは、子どもだけでなく親も含めて共に生活を見直していく力となりました。まさに集団保育の中でこそ可能であり、子どものエネルギーに励まされた取り組みだと思えます。

低年齢の集団保育の否定や、高知県のように保育園優位の措置状況の下で、学力が低い？のは保育園が多からだというようなご意見もあります。そもそも「保育」が保育園と

幼稚園に二元化された制度として現存し、保育園は養護、幼稚園は教育の場という行政的見方が社会通念として生きているのですから無理からぬことと思われませんが、入れ物にこだわるのではなく、内容から見直していくべきだと思います。制度的には分れていてもどちらも同年齢の子どもが生活しているのです。どの子にもその年齢にふさわしく発達していくための保育環境や内容が用意され、展開されるべきです。少なくとも高知の保育は、そのような視点に立って取り組まれていると思っ

知の保育者たちは、保育は養護と一体となった教育であるのとらえ、自らも学習し、子どもと共に伸びていく努力を積み重ねてきた歴史をもっています。高知の保育水準は、その数や条件だけでなく実践的にも高く評価されていることもまた事実です。

しかし、子どもを取り巻く状況は決して楽観できる状態ではありません。子どもが確かに育つための環境や生活は、目に見えるほどに崩れてきています。これからも今までのように二十四時間の生活をまるごととらえ、子ども一人ひとりを見つめながら親たちと共同の子育てをつくり出さなければなりません。そのためには、まず地域を子どもにとりかえす運動に取り組んでいかなければならないと思います。それは自然を守る運動であったり、遊び場づくりであったりするかも知れません。時には子どももついでに参加する子育ての学習会であるかも知れません。子どもたちのために何かを始めていきたいと思えます。もちろん、保育園はそのためのセンターとなるでしょう。

未来に生きる子どもたちが瞳を輝かせて遊ぶことのできる地域づくりを目指して、みんなの手をつなぎ合うことがいま求められているように思っています。

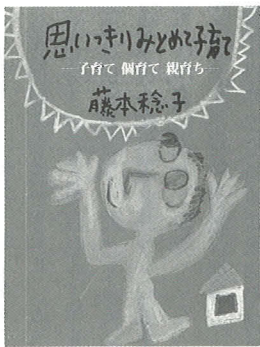
(元高知市立保育園園長)

## 思いつきりみとめて子育て

—子育て 個育て 親育ち—

藤本 稔子著 四六判・並製本・352頁・定価1,600円

三十八年の豊かな保育経験をもつ元園長がつづる素顔の子どもたち。子どもを知り、愛し、認め、働きかけをするなかで、どの子ども大きく伸びていく。



# 空海と宇宙飛行士、 そして遍路を結ぶもの

海老塚 和秀

「空海は宇宙飛行士だった」——。もう十年ほど前のこと、宗言宗の真祖・弘法大師空海をめぐる司馬遼太郎・立花隆両氏の対談がある月刊誌に載ったことがある。そのタイトルに「いささか驚きはしたものの」、「なるほど、そうかもしれないな」と頷いたことでもあった。何も弘法大師が今をさかのぼること千二百年も前に何らかの理由でそんな高度な技術を持ち得ていたとかいうSFめいた話ではない。当時、国家や世界という概念も曖昧であったであろう頃、大師はこの地上にあって、今日の宇宙飛行士が無限にひろがる宇宙空間からこの地球を眺めたに等しい視座を獲得していたということである。

されたある境地に立つとき、あらゆる存在、事象はただ単独で成り立つのではなく、他とのかかわりの中からはじめて存在することが理解される。ひとつの命を他とありとあらゆる命が支え合い、生かし生かされ合う世界の真相が立ち現れてくる。それはあたかもシャンデリアのように、一個の珠の光が別の珠に映り、その姿がまた別の珠に映し出され、こうして重々無尽に照映され合う、光の交響ともいべきビジョンである。清も濁も、喜も悲も、生も滅も、一切を包み込み、そうして、この世にひとつたりとも無価値なものはない曼荼羅世界である。

最中や月面において「手を伸ばせばその頬に触れられるくらい間近に」神の存在を感じたという、神がかつたような興味ある話が登場するのであるがそれはさておき、飛行士達の次のような言葉に注目したい。それは、「その惑星には無数の生命が満ちあふれ、その中に何一つ無駄な生命はなく、全てのものが自らの命を通じてこの地球という一つの生命体を成り立たしめている」——神の視座より母なる地球を見た時の彼らの感慨である。

「こうして遍路をしていると、この四国の水も空気も、太陽の光も、道ばたの草も木も、私をとりまくありとあらゆるものが、障害を持ったこんな私をも片時も休むことなく生かし続けてくれていて。そんな世界があることが確かにわかるようになってきました」と。自我の執われを離れたとき、「ちっぽけな自分」を生かし続けてくれていて大いなるいのちの存在に目覚め、ついには、「自我を空すれば、万物と我と同根」という世界が開けてくるのである。

# 苦悩する現代山村 (3)

大野 晃

山村の住民は〈生産と生活〉の活動拠点を集落に集めている。この活動拠点となっている集落を構成しているのは家族（実際は世帯）である。この家族は家族周期、すなわち結婚期、育児期、教育期、子供の独立後の夫婦期、老後期のいずれかの段階にあり、この家族が〈生産と生活〉にかかわる社会的共同・協力関係を相互に取り結び有機的に結合している組織が現在の集落である。この集落が集落として存続していくためには、集落の自治の実をなす田役、道の維持・管理、冠婚葬祭の実施、集落運営の中核を担う役職者の確保など〈生産と生活〉にかかわる社会的共同・協力関係を維持していく担い手が絶えず再生産されなければならぬ。まず、結婚によって生まれる「若夫婦世帯」、出産、育児を経

て子供の教育期にある「就学児童世帯」、子供の独立期に後継ぎを確保する「後継ぎ確保世帯」、後継ぎが結婚し新たに誕生する「新若夫婦世帯」、こうした家族周期にもとづく世帯類型の循環によって集落は自治の担い手を再生産することができ、集落が存続していきけるのである。

帯」、子供の独立期に後継ぎを確保する「後継ぎ確保世帯」、後継ぎが結婚し新たに誕生する「新若夫婦世帯」、こうした家族周期にもとづく世帯類型の循環によって集落は自治の担い手を再生産することができ、集落が存続していきけるのである。

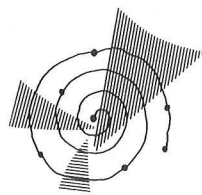
なっている集落)、限界集落(六十歳以上の高齢者が集落人口の半数以上を占め、田役、道役をはじめ冠婚葬祭などの集落の自治機能が急速に低下し、社会生活の維持が困難になつていく集落)、消滅集落(人口戸数ともゼロとなり消滅してしまつた集落)の四つの状態に区分し、その状態如何によって山村自治体の安定度・崩壊度を見るとともに、集落のそれぞれの状態に対応したきめ細かな活性化策を考える手だてにしている。

て子供の教育期にある「就学児童世帯」、子供の独立期に後継ぎを確保する「後継ぎ確保世帯」、後継ぎが結婚し新たに誕生する「新若夫婦世帯」、こうした家族周期にもとづく世帯類型の循環によって集落は自治の担い手を再生産することができ、集落が存続していきけるのである。

いづれかの段階にある個々の家族によって構成されている集落が、現在のどのような状態にあるのかをみるために、私は集落の状態を存続集落(集落のなかで五十五歳未満人口が半数以上を占めており、後継ぎ確保によって集落自治の担い手が再生産されている集落)、準限界集落(現在集落自治の担い手は確保されているものの集落のなかで五十五歳以上人口が半数を超えており集落自治の担い手の再生産が難しくなつてきている集落で、限界集落の予備軍的存在に

私は、こうした方法を「集落の状態分析」と呼んでいる。存続集落の準限界集落化を防ぐと同時に存続集落がより活性化していく具体策は何か。準限界集落をいかにして存続集落へ再生すべきか。独居老人の滞留する場と化している限界集落の高齢者がより豊かな老後を送るためにはどうしたらよいか、いま何をなすべきか。山村自治体の役場、農協・森林組合、普及所と集落の住民が一体となつて集落のそれぞれの状態に対応した具体策を考えていくことが山村自治体の「死活」にかかわる大きな課題であり、その取り組みの緊急性が迫られている。

いま私は北海道に住んでいるが、この北海道の紅葉が一段と鮮やかさを増してきた十月四日、農林水産省



高知県大豊町の限界集落化の状況

	集落数	集落の状態		
		存続	準限界	限界
1991年	85 (100.0)	3.0 (35.3)	49 (57.6)	6 (7.1)
1993年	85 (100.0)	2.0 (23.5)	59 (69.4)	6 (7.1)
2000年	85 (100.0)	8 (9.4)	37 (43.5)	40 (47.1)

注：①カッコ内の数字は集落総数に対する構成比を示したものである。  
②2000年の予測値は大豊町役場によるものである。

## 佐高信氏の

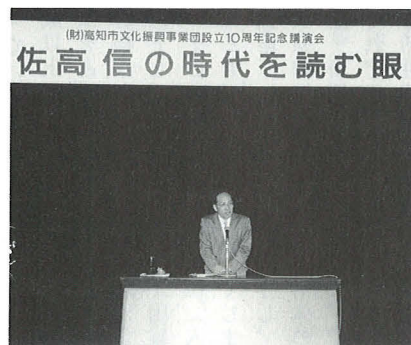
# 「時代を読む眼」

私の好きな人物の一人、坂本龍馬がよく寝小便をしたという有名な話がありますが、人には誰でも必ず弱点があるものです。私の論評がよく辛口だといわれるのは、この人間の弱さに思い到らない傲慢な人間に対して心ならずも噛みついていているからなのです。

さて、現在の政治状況を見てみると、理念も持たず甘い汁のある方へすり寄ってゆく政治家たちが多くいます。そしてこの自分を全く持たない政治家たちが日本を誤らせるのだといえます。一九九四年五月羽田内閣時代に、南アフリカに初の黒人大統領マンデラ氏が誕生しました。その就任式に日本から出席したのはたった一人でした。それに比べてアメリカからはゴア副大統領以下総勢六十名が出席しています。これからの世界情勢や国際関係を考えると、一つの大きなキーワードは「人権」

なのです。マンデラ氏の就任式に各国が代表を派遣するのは、いわば各国が人権についてどういう感覚を持っているかというテスト会場である訳です。しかしながら、そこにちゃんとした人をかなりの人数送ろうとしなかった羽田内閣は、この点で自ら落第点であることを暴露したのです。しかも羽田氏は同じ頃にヨーロッパへ外遊していることをみても、行けないのではなく行こうという頭が無かった、すなわち時代を見る眼が無かったということになるのです。

同様に、六年前の渡辺美智雄氏の「黒人は破産してもアツケラカカーのカード」との発言や中曽根康弘氏の総理大臣時代の「アメリカには黒人プエルトリコ人、メキシコ人が多数住んでいるから日本より知的水準が低い」などの発言をみても、日本の政治家の人権感覚の欠如を表しています。そしてこの発言によって、ア



メリカにいる日本人がどれだけ苦しんだか、海外にいるビジネスマンがどれだけ苦労をしたかを知れば、「渡辺氏は経済通」などとはいえないくなるのです。渡辺氏が宮沢内閣の外務大臣になった時に、アメリカの有力新聞ワシントンポストは「最も驚くべき選択である」と書きました。堂々と黒人差別をする人間が外務大臣になるとは考えられないという訳です。しかも今度はその人間を小沢氏は総理大臣に担ごうとしたのです。今の政治状況は一人の強い個性を持つ人間の思い通りにするという、強権的な色彩を帯びつつあります。強権政治で思い出されるのは戦時中のことです。戦時中の思想は「お国のために」と母親に息子を売らせる思想だといえます。一つの考え以外は認めない、母親が息子を売らなけ

を叩いているのです。いい大学を出ていい会社に入って過労死した人の例を挙げればきりがありません。ある若者は毎日仕事で遅くなり、母親に今日も帰れないと電話した時に、ふと「俺、もう死んじゃうよ」と洩らしました。この言葉に母親は「石の上にも三年だよ」と励ましたといえます。彼が過労死したのはそれから一か月後でした。その時、母親は自分がいった言葉が頭の中を何度も何度もぐるぐる駆け巡って離れなかつたといえます。

また、過労死した若者の少なからぬ人たちが机の中に辞表をしまっています。なぜそれを書いた時に辞めないのでしょうか。皮肉を込めていうと、私たちの「まじめにやれ、素直になれ」という教育の成果であり、本人たちは今やりかかっている仕事を成し遂げてから辞めようとし、そして過労死してゆくのです。まじめさや素直さを向ける先を考えないで「素直になれ、まじめになれ」ということは、息子を売ることと同じなのです。民主主義は、かっこ付きにせよ地域や学校に入りました。しかし経済大国になるにつれて、これをまったく寄せつけなかった会社がほとんど家庭や学校の民主主義を食い潰している、というのが今の姿だろうと思うのです。会社には民主主義

はありません。だから過労死だろうがサービスマンだろうが世襲や男女差別まである、まさに封建社会のままなのです。会社の「上からいうことを黙ってきけ」という態度を背景として過労死やサービスマン残業の問題が起こっているのです。

このように会社国家というものが、日本人の自立性や批判精神を奪い取っているのです。こうしたことに対してどう抵抗してゆけばいいのでしょうか。そのためには変わり者や少数意見を大切にすることが重要だといえます。これまでの歴史をみても変わり者が新しい文化を創ってきたのです。しかし、今の日本では逆に異質を消す教育ばかりをしてきました。私たちはこれまでマイ

ナスの価値であった「異質」をプラスの価値に変えてゆかなければならぬのです。流れに惑わされることなく、自分なりの価値基準を持たなくてはなりません。映画監督の伊丹万作氏は終戦直後に次のように述べています。「多くの人が今度の戦争でだまされたというのが、私の知る限りでは、俺がだまされたのだといった人間はまだ一人もいない。民間人は軍や官に、軍や官は上の者にだまされたというだろう。すると最後にはたった一人か二人の人間が残るが、一人や二人で一億の人間がだまされる訳

はない。つまり日本人全体が夢中になって互いにだまされたりだまされたりしていたのだらうと思う。では、だまされた者は正しいのか。だまされたといえれば一切の責任から解放され、無条件で正義派になれるように勘違いしている人は、もう一度よく顔を洗い直さなければならぬ。さらに進んで、だまされるということ自体が既に一つの悪であることを主張したい。だまされたといったら平気でいられる国民なら、おそらく今後も何度でもだまされるだらう」と。残念ながらこの予測は当たったといわざるを得ないのです。だまされたといふのは自分を持っていないかつたといふことでしかありません。

第二次大戦中、日本が大日本主義の名の下に植民地をどんどん広げている時に、石橋湛山という人は理性を失うことなく植民地化に反対し、むしろ相手を独立国と認めて交流すべきだといふ「小日本主義」を唱えました。今日日本には、国際貢献とか大国の責任というように形を変えて「大日本主義」が出てきています。今こそ改めて、この「小日本主義」といふ日本人の知恵を大切な財産としてよみがえらせ、そして再びだまされないために、自立性や批判精神を培ってゆかなければならないのです。

(編集部)

ればならないように追い詰める思想なのです。強権というのはリーダーシップととられるむきもありますが、本来強権とリーダーシップは別のものなのです。未熟な国民は強権を求めても、成熟した国民は自己を持っているが故に強権を嫌うのです。日本のマスコミの報道にしても、「首相候補に渡辺氏有利」と書く場合には、その人がかつてどういう発言や行動をしてきたかを書くのが最低の務めであるといえます。マンデラ氏の就任式の記事も、それがどういう意味を持っているのか、日本からどういふ人が行って、他の国はどうだったかといったことをきちっと書く必要があります。日本のマスコミは一過性の報道について厳しく反省すべきなのです。

一方経済的な面からみると、日本は会社国家であるといわれます。その中で過労死の問題が取り沙汰されていますが、過労死は働きざかりの若者に多い傾向にあります。親や先生は「いい学校からいい会社へ」と子供の尻をたたきます。しかしいい会社というのとはどんな会社なのでしょう。いい会社といふのが十年、二十年いい会社であり続けることはほとんどあり得ないのです。親や先生は「いい会社とは何なのか」といふ最終カードを伏せたまま子供の尻

## 朗読公開講座 — 朗読を楽しむ —

プロの俳優を講師に招き、朗読の基本となる声の出し方、ことばの発音、感情の表現などについて学ぶ講座です。どなたでもお気軽にご参加下さい。

〈講師〉 真弓田一夫氏

(劇団N L T所属・俳優)

〈内容〉 ・指導希望者による課題作品の朗読  
・講師による公開指導  
・講師による模範朗読(森鷗外『高瀬舟』)

〈日時〉 平成7年2月4日(土)午後1時30分～4時30分

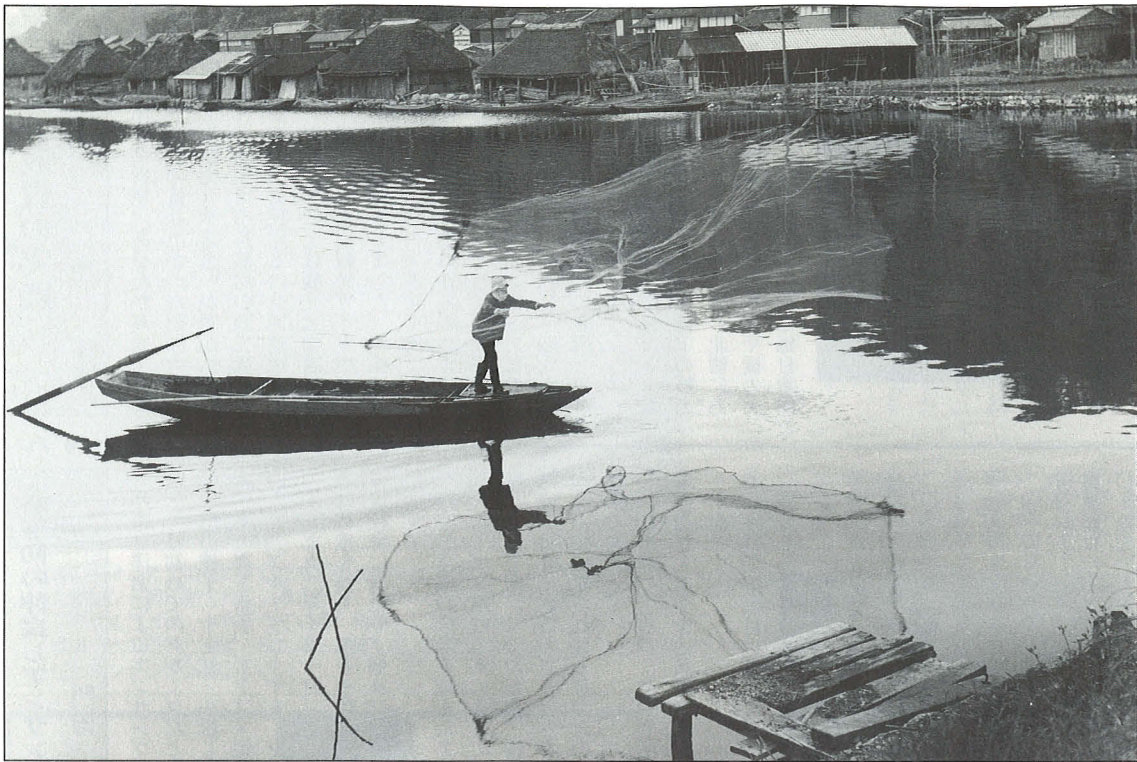
〈会場〉 自由民権記念館・民権ホール

〈定員〉 140人

〈参加費〉 一般1000円、中高生500円

※お申し込み、お問い合わせは事業団(0888-73-4365)まで。





第10回高知の映像コンテスト入賞作品

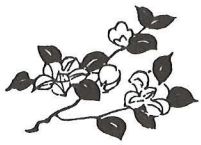
高知を撮る

## 昭和30年頃の絶海の池 曾我 義雄

ひがな一日蟬が鳴くように言っていた  
〈政治改革〉も、区割法案が国会を通過

### 品性

#### 風俗歳時記



する前後になると、関心はもっぱら選挙区争奪に移ってしまった。一世を風靡した「改革派」と「守旧派」の主張も、論点がいまいのまま色褪せたものになった。本質がぼやかされ、ないまぜにされてしまった。

「保守」「革新」という言葉も、やがて辞書の中だけの言葉になってしまうのだから。知事選への六選不出馬の意向を固めた長洲一三神奈川県知事をはじめ、八十三年に復活した北海道、福岡県の革新知事も、今期限りで勇退を表明しており、本年四月以降の革新知事は、沖縄県の太田知事だけになりそうだ。高知県の革新市政も、高知市を最後に一つの時代が終わった。

時代とともに何かが生まれ、何かが消えていくのが世の常とはいえ、その変革にはそれぞれの意義があったように思う。それを不問のままにして、しらけ現象のなかに埋没させていいのか。(晋)

松山市出身の中村草田男が、昭和六(一九三二)年に俳誌『ホホトギス』に発表した「降る雪や明治は遠くなりにけり」をなぞらえると、「氷雨降る昭和は遠くなりにけり」といえるほど、「昭和」は激動の日々をかさねて遠くかすんだ。

しかし、半世紀まえの昭和二十一年(一九四六)年十二月二十一日の、南海地震で体験したことは、今もつて忘れられない。

わたしは、地震の前日に郷里の土佐市宇佐町へ帰り、その夜はひとり二階で寝た。就眠したのは午前二時ごろだった。

ぐっすり眠っていた。ハッと目覚めて目がさめると、父が階下から、「ユタカ!ユタカ!」と絶叫していた。

闇をひき裂く烈しい震動。とても階段を降りきれない。やむをえず廊下に出て、庭へ飛び下りた。踝を痛めた。父が天秤棒をもってきてくれた。それにすがって、庭先の蜜柑畑へいくと、祖母と母と妹が地べたにうずくまっていた。

すさまじい地鳴り、西北の山やまから、火花のように閃光が飛びちった。

数分後に「津波がくるゾ!!」と、あわてふためいて避難する人びとの喚声が聞こえた。わたしたち家族五

人は手を取りあって、三百メートルほど隔てた裏山へ逃げのびた。

現在、宇佐魚市場前の県道十字路口に、「震災復興記念碑」が建っている。『午前四時二十分突如南海大地震起ル(中略)津波入ルコト七八度第三回ハ高サ五米前回ヨリ二十分ヲ経テ山麓ニ達スル(中略)家屋ノ流失倒壊三一九半壊三二三床上浸水ヲ含ンデ一、三二〇全戸ノ八割二分ニ当ル罹災者ノ数六、二五〇当時ノ人口宇佐七、六五九全町一〇、二〇六(後略)』(碑文のまま)

さて、二時間ほどして夜が明けそめた。わたしは粗朶を積んだ脇に立って、わが家をながめた。屋根瓦と二階の北窓がわずかに見えた。ホッととした。そのことを祖母に告げると、「そうかえ。あれからずーと、神さまや仏さんにお祈りしよったから、



御利益があったがやろ」と、うつむいて合掌した。

やがてわたしは、からだを乗りだして前方を見た。波はいくらか速度をはやめて、東から西へと渦巻いて流れ、壊れた家屋や家財道具、家畜などが、浮きつ沈みつ漂っていた。

そして、おどろくことを目撃した。大人の臍あたりまで引いた波につかかって、大勢の人びとが右往左往していたのである。

箆筒の引き出しをこじ開けて、衣類をあさっているもの。重油のドラム缶を小舟にのせて運んでいるもの。家財道具をもち去るもの。甘蔗(当時自家製砂糖)の束を両腕で抱えているもの。酒樽、酒ビンなどをさげているもの等々で、白鬼夜行(註・多くの人が奇怪な行動を公然と行っていること)とは、こうした光景だろうか、と思った。

ところで、これは後で知ったことだが、私とおなじように、白鬼夜行のありさまを、安政元(二八五四)年に見た人がいる。そのひとは、宇佐町橋田の真覚寺の住職、井上静照である。

かれは、安政元年十一月五日に起こった安政大地震を、『地震日記全九卷』(「真覚寺日記」と呼称)にくわしく書いている。

それでは、地震が起こった翌六日と八日の記述を抄記してみよう。

『同六日晴天朝日ノ出ノ色紅赤昨日ニマサレリ橋田ノ者昨夜より飢渴ニ付山にて粥を炊キ芋を蒸し当寺より分与へ食せしむ一中略一今日ハ流レたる跡にて食物諸道具拾取ル者夥シ薑菴家四五軒屋頂沖より流し寄ル箆筒長持家具類を始とし衣類等ニ至ル迄砂中ニ埋るを拾取有船二乗リ沖ニ出争拾も有欲界之習演返ニ出ル人数百人也一後略』

『同八日晴天男子分ハ各々濱(出て竹木板柱之類拾取勝手宣敷土地を見受て家を作ル中ニハ拾取品入違有之口論ニ及ぶも有日々之喧嘩之声たへす一後略』

以上。原文のまま引用したが、九〇年余の歳月をへだてて、井上静照とわたしが見た修羅場は、いうならば欲望をむきだしにした、人間の哀しい性の縮図だろう。

さて、先頃の北海道東方沖地震では、どんな修羅場がくりひろげられたか。そのあたりのことは、マス・メディアから何も伝わってこないから、知るよしもないが……。

良寛さまはおっしゃった。

災難に逢う時節には  
災難に逢うがよく候

(高知市文化振興事業団理事)

# 生涯教育の実践

辻 隆道

国民休暇構想、あつたか高知、県民ガイド運動の盛り上がった昭和六十二年に「土佐観光大学講座」が開かれまし。それは高知市市長部局の観光課と教育委員会の中央公民館との共同連携事業でした。平成元年に土佐観光大学講座は終了し、直ちに「土佐観光ガイドボランティア協会」が発足しました。現在の会員数は約一三〇余名の大所帯です。

活動としては、県内外からのお客様の要請があれば、ガイドとして観光案内をしています。これもボランティアなので無償です。また市内の町内会、老人会、小学校の生徒さんに、近くの名所・史跡の説明をすることもあります。

また高知城では毎日曜日にテントを張って高知城はもろんのこと県下の観光案内をしています。また、城の北側にある駐車場では毎土・日、はりまや橋のデントターミナルビル二階では毎日案内



# 県下初の仲良しアンサンブル

門田 綾子

邦楽と洋楽によるアンサンブルとして県下では初めてのグループだと思えます。門田綾子、十七絃・小松しのぶ、フルート・森下幸美、ピアノ・恒石彰子の四人で「グループしずん」を結成したのが一九九二年十月十日。各パートの四名は教室を持ち、弟子や生徒達の技能と育成教育に当たり、個々に活動を行っています。

邦楽と洋楽の分野を越えたアンサンブルグループを組むことによって、より高度な演奏を聞いていただき、情操教育の一環に役立てればと思うとともに、福祉にもお役に立てればと思ったのが結成の動機です。

「しずん」というグループ名はその名の通り「四季を通じて年四回はコンサートを」という目的で名付けました。

結成して二年二月で、カ月ですが、ソロン、ホスピタル、チャリティー、ホーム、郵便局、ピーなど



# 「楽しく描く」を旨として

山本 清一

九年前の昭和六十年七月八日より高知北ロータリー・クラブの絵の好きな数名が山本の居間をアトリエとして、美人のモデルを描いていた。一方、高知みづえの会の一部のもが、昭和六十二年三月山本ビル六階で水彩画を描き始めた。いずれのグループも作品をサカナに杯を傾け、芸術を論じ、世相を語り充実した楽しいひとときを過ごしていた。

この酒と絵を愛する両グループがひとつにまとまり、さらに仲間が仲間を呼ぶ形でメンバーが増え、遂に十五名となった。ふたつのグループに名前をつけることになり、検討を重ねた結果、楽しく絵を描く事を趣旨としているので「楽画会」と命名され、平成五年十月第一回楽画会と命名され、平成五年十月第一回楽画会

がギヤラリーパンで開かれた。また近年は県展入選入賞作家も数名出している。当会には特に規則もなく、指導者もいない。このため自由勝手に描ける楽しさに



# ジャズとの遭遇

伊藤 彰介

元は同じ高校のブラスバンド仲間二人が始めたバンドで、もう三十年近くやってきた事になります。

ジャズバンド「アーティスト・ギルド」になって十五年ですが、それ以前は「ラバーソウル」と言う名前前でロック・ラテン・フュージョン等いろんな事をやっていました、この間他のメンバーは何度となく変わりましたが、私ともう一人はそのまま現在に至っています。

学生時代に初めて聞いた訳の分からぬ音楽「モダンジャズ」と遭遇し、これを何とか理解してやろうと思ううちに泥沼に足を捕られるように、いまだにその実態を追い求めている状態です。

音楽は聞いて楽しむ方がほとんどですが、演奏すればその十倍は楽しめます。特にジャズは即興演奏が醍醐味で、一度この味をしめてしまえば後はやみつきになる事うけあいです。

ただリスナーを唸らせるほどのアドリブをするには、並大抵の努力では出来ませんし、練習を積み



# 散歩の途中で



屋地の中ほどを一箇幅の水路が横切る民家を見かけた。この家は相当年季の入った赤レンガ塀に囲まれているのだが、水路の上部部分だけは橋の欄干をイメージさせるデザインが施されている。熟達レンガ積み職人の遊び心の発露か、はては清い水の流れに対する施主の心意気なのかは知らないが、こうしたちょっとしたオシャレは結構楽しい。

# 風俗

## 鮎の心は

一面に並べた柿の葉に焼酎浸けの米粒を置く、それを食べた雀は酔って寝込み、日に照らされた柿の葉がくると雀を包み込む。見計らって箒で掃き集める」といった法螺話がある。多くを楽に捕獲したい気持ちの表れだろうか含蓄もあり面白い。私は昨年の夏、鮎の友釣りを経験し、

なんとか釣りの仲間に入れていただいた。究極の釣りと呼ぶ人もいるように、この釣りの醍醐味は釣果など気にさせない。これまで漁は投げ網を専らとしていたが負け惜しみでなく網の百匹より友釣りの五匹に充実感がある。もっとも、素人には難渋する多くの手順と操作があり、その良否

業務をしております。

我々会員はお客様からの問い合わせに的確に返答ができるように、常に多くの情報を集め、勉強しておりますし、お客様を案内するときは一緒に歩きながら観光地の説明をします。心身ともに鍛えておかなければなりません。まさに生涯教育を実践している協会であると自負しております。

連絡先 高知市はりまや町一五一一  
デントターミナルビル二階  
中央観光案内所内  
電話 〇八八八―八三―一三八〇

で数多くのコンサートを行って来ました。その中でも、一九九四年九月十七日県立美術館ホールでのチャリティーコンサートでは曲目の一部に「しずん」独自の編曲を取り入れるなど、聴衆の方の満足度をいざだき大盛況に終わりました。これをステップに、オリジナル曲にも挑戦し、よりすばらしい演奏技能で、高知県を代表するような「グループしずん」にしていきたいと張り切っている今日この頃の、なかよしグループです。

連絡先 南国市廿枝二二七九  
電話 〇八八八―六三―一八五〇

加えて、酒と共に忌憚のない批判の飛び交う合評、絵を通じての友情の交歓等に発会当時の気持ちを今も受け継いでいる。例会は毎月第二日曜日に一時から五時までがモデルによるデッサン会、そのあとがお楽しみ酒を飲みながらの合評会やおしゃべり会となっている。現在会場は山本ビルから電停旭町一丁目近くのスナック「楽家」の二階に移し、賑やかに行っている。入会御希望の方は左記まで。

連絡先 高知市北本町二ノ七ノ十三  
山本ビル六階  
電話 〇八八八―八二―五〇五九

重ねなくては出てこない「フィーリング」があるのも事実です、しかしそれだけにやり甲斐も生まれてきます。

現在レパトリー二〇曲、女性ボーカルを含めたスタンダードナンバーではかなりの評価を頂いており、他県からの演奏依頼も来るようになりました。

今後は最終目標であるジャズの本場でこの腕を確かめてみたいと思っております。一緒にやってみたい方、一度聞いてみたい方ご連絡下さい。

連絡先 五ノ川郡伊野町枝川二九三九一  
電話 〇八八八―九二―一九八九

が結果に繋がることが多いでもない。この釣りに最近変化の兆しが見えるという。闘争心の強い鮎が減ったことである。独立した縄張りを持ち、それを守る意欲の強い鮎は当然早く釣られる。このパターンが長年繰り返されれば、こうした変化も理論的には成り立つだろう。

テリトリーも持たず、群れの成り行き任せばかりの鮎になれば、今後友釣り漁法は減り、焼酎などを飲ませて簡単に捕獲となる時代が来るのかも知れない。

しかしながら、琵琶湖産の鮎は他の河川に放流されると俄然追いが強くなるという。環境の変化がそうさせるのか新天地を望むのか定かでないが本来の習性は常に秘められているということだろう。心配は無用と考えたい。それにしても、最近人間社会もガッツのある若者が少なくなった気がするのだが。(かむ)

第11回

## 高知市都市美デザイン賞 推薦募集

事業団では、街に個性と調和をもたらしている優れた建造物を広く知ってもらい、より美しいまちづくりを進めるよう「高知市都市美デザイン賞」を選出しています。

身のまわりで、街の美観や景観づくりに貢献している建物・モニュメントなどを推薦してください。

**【対象】**高知市内にあって平成6年1月1日から平成6年12月31日までに完工した建築物・建造物

**【推薦締切】**平成7年1月31日(火)  
(郵送の場合当日の消印有効)

### 【推薦】

どなたでも推薦できます。はがきに次の事項を記入のうえ、推薦してください。一人で何件でも推薦できますが、はがき1通に1件とします。

- ① 建築物・建造物の名称・所在地・完成時期
- ② 推薦の理由
- ③ 推薦者の住所・氏名・年齢・職業・電話番号

### 【送り先・問い合わせ先】

高知市文化振興事業団「都市美デザイン賞」係

第11回

## 写真コンテスト・高知を撮る 作品募集

**【テーマ】**高知を撮る

\*高知に関する写真であれば撮影対象は問いません。

**【応募】**

- \*どなたでも、一人何点でも応募できます。
- \*ワイド四つ切以上の作品で、発泡スチロールパネル貼りとします。
- \*組写真は3枚までで、組写真であることを明記してください。
- \*その他詳しい要項は事業団までお問い合わせください。

**【応募締切】**平成7年1月31日(火)

**【賞】** 特選 2点(賞状と賞金5万円、副賞)  
準特選 15点(賞状と賞金1万円、副賞)  
入選 70点以内

**【作品展】**

平成7年3月市民フロアにて開催予定

**【応募先】**

- \* (財)高知市文化振興事業団
- \* 高知県カメラ商組合加盟店または、フジカラープリント取扱店

第5回

## 高知出版学術賞

推薦受付

「高知出版学術賞」は、当該年度における最も優れた学術出版物を顕彰することによって、学術研究の振興を図ることを目的とした賞です。該当図書について、皆様のご推薦をお待ちします。

**【対象】**

次の事項をみたすもので、高知出版学術賞審査委員会に推薦されたもの。

① 高知県内に在住する者の学術的著述、または他県在住者で高知県に関する事項をテーマにした学術的著述。

② 一九九四年中(奥付の日付による)に発行された単行本。

**【推薦】**

自薦・他薦を問いません。必要事項を記入した所定の推薦書に、該当図書二部を添え、審査委員会まで提出して下さい。なお、推薦書は請求下さいはお送りしません。

**【受付期間】**

一九九四年十二月十日(土)～一九九五年一月三十一日(火)

**【表彰】**

三点以内とし、それぞれの著者または編者に賞状と賞金十万円を贈ります。

\*推薦・お問い合わせは、文化振興事業団内、高知出版学術賞審査委員会までお願いします。